# 霊体の成仏屋

カワウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霊体の成仏屋

【Ｎコード】
Ｎ４９２９ＢＡ

【作者名】
カワウチ

【あらすじ】
霊となった人間を成仏させる仕事【成仏屋】を営む青年、荒川。今日も彼の所に、死神に追われた霊が舞い込んでくる。

## 少年少女と、切り裂きフード（前書き）

この小説は随分昔に書いた処女作で、文章が粗いです。
途中までしか書いてありませんでしたので、途中から書きますが、
それまではこんな感じの文体で行きます。

## 少年少女と、切り裂きフード

夏休みのある日の深夜一時、普通なら深夜徘徊に捕まる時間に少女は歩いていた。

場所は商店街。明るいうちは人気があるこの場所も夜になると、設置された蛍光灯がうっすらと明かりを照らすだけのさみしい場所になる。そんな所を少女は歩いている。

実は先ほどから補導員とすれ違ったりしているが、声もかけられない。その理由は簡単。

少女、柄谷小春はすでに死んでいるからだ。

死因は交通事故だった。

始めは小春も受け止められなかった。しかし家まで帰ってみて、両親が喪服を着ているのを見て、自分が死んだ事実を受け止めざるを得なかった。

しばらくはその場にいようと思った、でも泣いている両親の顔は見ていられなかった。

だから小春は歩いている。あてもなく夜の商店街を。

「これからどうしよう」

小春は人が死ねば、天国や地獄に行くものと思っていた。しかし自分はここにいる。周りに頼れる人もいない。自分がどうすればい

いか小春は分からないままでいた。

「こんな時、優斗君がいてくれたらな……」

優斗とは小春の幼馴染の名前だ。

神谷優斗。小春が中学二年の秋に東京の中学に転校するまではずっと近所に住んでいた。

なにかと面倒見が良くて、今でもメールで相談に乗ってくれたりしていた。何故だか優斗といると、こんな状況でも笑っていられるような気がした。

「でも私と一緒にいられる状況だったら優斗君も死んでいることになるよね」

優斗が現れるというのは、小春にとって嬉しいようで、嬉しくない状況になる。

考えても仕方がないので歩みを進めることにする。すると正面から何かを引きずる音が聞こえてきた。

（なんだろう、コンクリートに何か引きずる音が聞こえる）

音はどんどん近付いてくる。しかし暗くて前は良く見えない。

少しずつ、少しずつ音は大きくなる。音が近づくにつれ、なんとなくだが人影が見えてきた。

突然音が止まる。しっかりと音の出所が見えた。

「え……あぁ……」

思わず言葉が出てこない。うっすらと見えたソレは、生きている頃には見ることのなかった、おとぎ話のような存在。

顔が見えないほどに深くかぶったフード。

右手には大鎌。

その姿はまさに死神だった。

怖かった。逃げたかった。でも足がすくんで動けなかった。

小春の前で止まったフードは鎌を振り上げた。思わず目をつむる。

カラン

何かが落ちた音がした。目を開けるとそこには、

「おいアンタ、大丈夫か！」

鎌を落として吹っ飛んでいるフードと、フードにとび蹴りを食らわしている少年の姿が会った。

「え、あ……」

「とりあえず。逃げるぞ！」

顔は暗くて見えない。でも声は聞いたことがある気がした。しか

しパニックで誰の声かを特定することはできない。

少年に手を取られて商店街を疾走する。しばらくして後ろから金属音が再び聞こえてくる。

「どっかに隠れねえと……」

そう呟く少年に引っ張られながら、スピードを極力落とさず路地に入っていく。

このあたりの路地は大分入り組んでいて、隠れるのにはもってこいだった。

金属音が止む。探しているのだろうか。

「何とかまけたかな」

少年が話しかける。

「……え？」

思わず耳を疑った。

落ち着いて声を聞くと、その声は自分がよく知る声。優斗だった。

何故優斗君は私のことが見えて、触れるのだろう。まさか優斗君も……

と小春が考えていると、優斗も驚いて小春に問いかけてきた。

「ま、まさかお前……小春か？」

優斗はひどく動揺していた。声を震えながら続ける。

「お前……死んでるの……か？」

答えられなかった。自分が死んでいることを告げたらどう思われるのだろう。しかし優斗は、

「頼む……何か言ってくれよ……死んでないって言ってくれよ……頼むよ……」

うつむきながら、続けた。こんな状態の優斗を見るのは初めてだった。今嘘を言っても優斗が傷つくだけだと思った。

「死んでるんだ……私はもう死んでいる」

「嘘だろ……なあ嘘だって言ってくれよ」

「嘘じゃないよ、交通事故。こんなつまらないことで私の人生って終わっちゃったんだ」

昔から小春の話を優斗は疑おうとはしなかった。しかし今回ばかりは信じられなかった。信じたくなかった。

信じたくないのは小春も一緒だった。自分のことを誰も見ることができない。ましてや触るなんてもってのほかだ。

しかしそれを優斗は成し遂げた。見つけるだけではとどまらず、触れることまで成功した。

それが何を意味するか、薄々小春も分かっていた。

「ねえ優斗君」

「……なんだよ」

「優斗君も死んでるんじゃないかな？」

優斗はハッとしたように俯いた顔を一瞬上げ、また元に戻る。そして続けた。

「ああ、俺も死んでいる」

「……ッ！」

驚いて声が出なかった。嫌な予想は現実になってしまった。

「なあ、小春。覚えてるか？　お前が転校する前日にした約束」

約束、忘れるはずがなかった。

「あの時小春の引っ越し先にすげえ花火大会があるから一緒に観ようって言ってたじゃん」

そう、花火大会がある。日時は……明日。

「本当はさ、明日に逢う予定だったのにな」

そうだ、本当は明日逢うはずだった。しかし私達は一日早く逢っ

てしまった。幽霊となって。

「なんで……なんでこんな形で再開しちまったんだろうな俺達」

本当にどうしてだろう。再開したのだから嬉しいはず。しかし涙ばかりがあふれてくる。

「ねえ、優斗君はなんで死んじゃったの？」

「俺もな、先月車に跳ねられたんだよ。馬鹿みたいに飛びだした子供がいてさ、俺は反射的に助けちまったんだ。子供は助かったよ。でも俺は助からなかった」

「そっか……」

「マンガみたいな死にかただろ。あの時ばかりは、自分の性格を呪ったよ」

二人の間に沈黙が続く。その間約三十秒。しかし二人には数十分にも思えた。

「なあ小春」

沈黙を破ったのは優斗。

「もう暗い話はやめねえか？」

俯いたまま提案をした。そのまま表情を変えずに続ける。

「昔、暗い話は五分で止めるってルール作ってたじゃん。まあもう

過ぎてるけど。だからもうやめよう」

小春もそれに賛成だった。

「そう……だね、もう終わっちゃったこと嘆いていても何も変わらないもんね」

二人とも切り替えが早かった。切り替えないとやってられなかった。

二人は、転校した後の話をした。優斗と小春のクラスの話、小春の転校先の話など様々だった。

二人とも、本当は生きているときに話したかったと思っているが、心にしまう。せっかく明るくなってきたのに、こんなこと言ったら暗くなるだけだからだ。

二人は自分達の置かれた状況を忘れているかのように笑っていた。

それを引き裂くように再び音アノ音が聞こえてくる。

さっきの音と認識したときには、既に優斗に手を握られていた。

「まずい、走るぞ！」

二人は全速力で走りだす。

正直なところ、この程度のスピードなら優斗は余裕だった。しかし今は小春がいる。二人とフードの間が少しずつ詰められていった。

「畜生、逃げ切れねえぞこれ」

「ど、どうするの優斗君！」

小春も小春なりにいろいろと考えてみる。しかし考えれば考えるほど頭が真っ白になっていく。

「どうするったって、やるしかねえだろ」

急停止、優斗は近くにあった鉄パイプを手に取り身構えた。

「お前は下がってろ！」

小春は言われるがままに後ずさる。

「やってやる……こんな時にビビってどうするよ俺！」

優斗は鉄パイプを握りしめ、フードに向かって走り出す。

「食らいやがれ、死神野郎！」

優斗の攻撃はフードの鎌で弾かれた。鎌とパイプがぶつかり合う音が聞こえる。

この時点で優斗は二度目の死を覚悟した。たった一回の攻撃で鉄パイプは折れてしまい、もう使い物にならない。

優斗は一カ月幽霊として過ごしてきた。出会ってきた幽霊もたくさんいた。だからこそ知っている。

あの大鎌をくらうとどうなるかを。

フードが攻撃態勢に入る。優斗は必死に助かる方法を考えていた。しかし浮かんでくるのは、少し前に教えてもらった、あの大鎌の詳細だけ。対処法なんて浮かんでこない。

（やばい、避けられねえ……ッ）

身を切り裂かれる覚悟をした。が、鎌が振り下ろされることはなかった。

（何が……起きた……？）

状況が読めてない優斗が見たのは、異様な光景。

誰かがフードの手首を抑えていた。鎌はびくとも動かない、一体どれほどの力が加わっているのだろうか。

「何をしている少年。手が空いてんだったら、その辺に転がってるパイプでコイツの頭やっちゃってくれよ」

声の主は、フードの攻撃を止めている青年。もちろん二人とは面識がない。

（本当に何なんだ一体。てか誰なんだこの人）

そう思いながらも、気がつけば優斗はパイプを持ち、フードの頭に振り下ろした。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4929ba/

霊体の成仏屋

2012年1月13日18時46分発行